

## コペルニク

アルフレド・ノイエス

此の地動説首唱者は、一生涯、かくれたる學者としてポーランドの田舎に宇宙研究に耽り、遂に一書 De Revolutionibus を著はしたが、之れが辛うじて臨終の床を飾つたといひ傳へられる。此の詩は現代の詩人ノイエスがコペルニクの人と學とをうたつたもので、よく理學者の心境を書き、世と時代とを教へてゐる詩である。取材と構想と共に珍しい劇詩であるとも見られる。なやみと戦ひの學究生活に精進したコペルニク、宇宙の眞理と世の權威と、友の情誼との間に一生涯を捧げたコペルニクを巧みに書いてゐる。

コペルニクは今靜かに死の床に臥し、  
隣り人等は戸口にて、どぎれどぎれ、さゝやく。  
眼を見開き、互ひに耳うちして、  
うす暗き夢幻の室をのぞき込みつゝ——  
彼が日頃、星を見し壁の穴より  
『さうとうニュルンベルグから  
彼の書物が來たには來た。しかし  
誰が其れを見せるのか？』『中が書き換へられたのだと！  
ロマの御許しはあつたのだのに。この緒言を御覽！  
此の發見は、夢だと書いてある!!』  
『彼は、未だ來ないか、未だ來ないか、と  
百千度もきいてゐたのだから——  
此のページを引き割いて了うか？』  
『氣が付くだろうよ』

上の室の僧たちは、「暫く待つて居なさい」  
と言つた。「彼は忘れて了うかも知れないから  
此の最後の聖典が彼れの心を休ませ、  
永世の平和に彼を送るかみてことにもなろうから。」  
人々は足音靜かに上手へ行き、

戸を少し開いて、のぞき込めば、  
コペルニクは白い死の床にあへぎあへぐ。  
此の世界を、果てし無い世界とした

せまき室の中に、燈火一つ照り、  
思想の戰士の顔は、土色に見ゆ。  
かつては、もろ々々の天を仰ぎ、  
古き蒼穹を幾夜か見し彼の眼——  
此の榮ある眼も今は閉ぢんとす：  
床の傍に跪く二人の女、  
脚の方には、彼を見守る老醫師、  
頭邊には、小聲に唱するフランシスカン僧一人。  
燈火は淋しく聖杯を照らす。すべては静寂、  
葡萄酒の香かすに、遠い天上界の呼吸と通ふ。

今や、戦ひの真中に、勝利未だ不安に遠く、  
こゝ最後の號令を下す臨終の軍人の如く、  
コペルニクは、熱病の夢の中に、さゝやく——  
『もはや死だ。しかし今少し死を引き止めよ。  
少しばかり、此の死の戸口にて。  
かの書物が首尾よく出来たのが知れるまで、  
醫師よ、全力を盡せ。吾は  
あの書物の一冊も見て、手に觸れたい。  
まだ其れを持つて來ないのか？ 約束は  
今日の夕暮れまでにさあつたのに。誰か一人  
行つて催促せよ。夜明けまで吾は死を  
引き止めるから。

未だ持つて來ないのか？——ニユルンベルグから。  
吾をだますのか！ 是非 あれは立派に、

首尾よく印刷されて、人々に讀まれるやうに。  
それなら吾は死ぬも好い。吾れの役目は終るのだ。  
何が遅らせてゐるのか？ 誰か行つて、もはや  
吾が氣力が衰へ行くと言へ。  
あの書は、天使の手の如く、  
吾れには安らかな床の枕であり、  
くら闇の中の燈火なのだ。  
汝知る如く、吾は此の書の光を永く  
草むらの中にかくしたが、今後も其のまゝ  
世に出ないかと心配だ。短い一生涯の  
元氣な頃には、さほど大切と思はなかつたが、  
今や日は暮れ、夜の幕は下りた。  
吾は、人々の魂を導く燈の混亂を恐れる。

しかし、今ぞ吾は知る、人生の三段階を。  
初めは日の下に満足して、  
たゞ見ゆるものを皆眞理となす。  
次ぎに、吾等ささる、或る夜  
無限を見る吾等の眼を育ひにし、  
晝の日の明るみが如何に  
すべての智識をなみせしかを。

こゝに人々は畏れ退き、疑ひて道を失ひ、  
最後に、死の迫る如く、夜陰近づき、  
其の莊嚴なる蔭の中に神を、  
絶對智を見て、總てと和らぐ。  
吾れも、吾が生涯中、思索せしは  
此の地球を全宇宙の中心とし、  
日と月とに照され、巡られ、  
幾萬の星ランプの如く居並ぶ大水晶球は

各々其の所に居て、絶大なる光明輪は  
此の暗闇の人の世をめぐる思想であつた。  
夜毎々々、確かなる歩調にて彼等は運行し、  
年毎に、一點の異常もない。  
其の秩序。其の休み場、其の運行天球中の諸恒星など。  
北斗は永く天極を指し、天球中に固定する。  
さらば、此の壯大なる不變輪を如何に説くや？  
此等の微光体を皆、  
地球に無關係の太陽であるとせば、  
毎時一萬リグづゝも動くとも、吾等の眼には  
髪の毛の幅にも過ぎずと見ゆる此の大宇宙を。  
全く想像外のことと思へど、  
尙ほ、吾は日々無限の權威の下に伏し、  
其れに望みをつなぐ。

